

ダイズシストセンチュウの発生に注意！

平成26年10月に、岡山県中北部のダイズ圃場で葉が黄化し、生育不良となる障害が発生しました。被害株の細根には乳白色のシスト（センチュウの雌成虫が肥大、成熟して多数の卵を含む皮袋になったもの）が確認され、ダイズシストセンチュウによる被害であることが判明しました。本センチュウは国内では主に関東以北の寒冷地に生息していますが、近年では大分県、熊本県においても確認されており、ダイズの主要有害センチュウとして知られています。本県では、1960年代後半に県中北部（火山灰土地帯）で発生が確認されており、近年は目立った被害は認められていませんでした。今後、本虫の宿主であるダイズ、アズキ栽培圃場（特に連作圃場）における本センチュウの発生に十分注意をお願いします。

《ダイズシストセンチュウとは》

- （1）ダイズのほか、アズキ、インゲンマメに寄生する。ダイズでは生育が停止し草丈が低くなり、茎葉は黄変する（図1）。センチュウ密度の高い圃場では、根粒、着莢数、百粒重が減少し、大きく減収する。
- （2）シスト内の卵中（図2、3）でふ化した幼虫は1回脱皮し、2期幼虫となって越冬する。2期幼虫は春期にシストから遊出し、宿主の根に侵入して養分を摂取する。雌は成虫になると根内で肥大し、レモン状となり、頭部を残して根の外側に乳白色の虫体を露出する。雌成虫は数百個の卵を内蔵した状態で死亡し、茶色のシストとなり、根から離れて土中に残存する。シストの状態では、土壌中で長期間（最長9年）生存し、後作の発生源となる。

《防除対策》

- （1）圃場に黄化した株がまだ少なく、根に乳白色のシストがついている場合は、その株を抜き取り圃場外に持ち出すことで、次年度の卵の数を格段に減らすことができる（時期が過ぎるとシストは茶色に変わり、根から離れ土中に残存する）。
- （2）機械や長靴にシストを含んだ土壌が付着し、発生圃場が拡大するので、発生圃場に入る場合は最後とし、出入り後には機械や長靴に付着している土壌を十分に洗い落とす。
- （3）水田転換可能な圃場は水稲との輪作を行う。畑作を続ける場合は本虫が寄生しない作物へ転換する。
- （4）薬剤防除は効果が認められるものの、シスト内の卵を完全に死滅させることができないため、他の防除対策と組み合わせる。
- （5）本虫はアズキにも寄生性があるので、ダイズと同様の注意を払う。

表 ダイズ及びエダマメにおけるダイズシストセンチュウ適用の防除薬剤

薬剤名	農薬使用基準			
	使用時期	使用回数	使用量	使用方法
D-D剤	作付け10～15日前まで	1回	20L/10a	全面又は作条処理
ラグビーMC粒剤	(ダイズ)は種前 (エダマメ)は種又は定植前	1回	20kg/10a	全面処理土壌混和
バイデートL粒剤	(ダイズ)は種前 (エダマメ)は種又は定植前	1回	6kg/10a 30kg/10a	作条土壌混和 全面土壌混和
ガスタート・バスマイト微粒剤	(エダマメ)は種又は定植21日前	1回	30kg/10a	土壌混和

農薬の使用に当たってはラベルをよく読み、農薬使用基準を厳守する。



図1 ダイズシストセンチュウにより草丈が低く、
茎葉が黄化したダイズ圃場

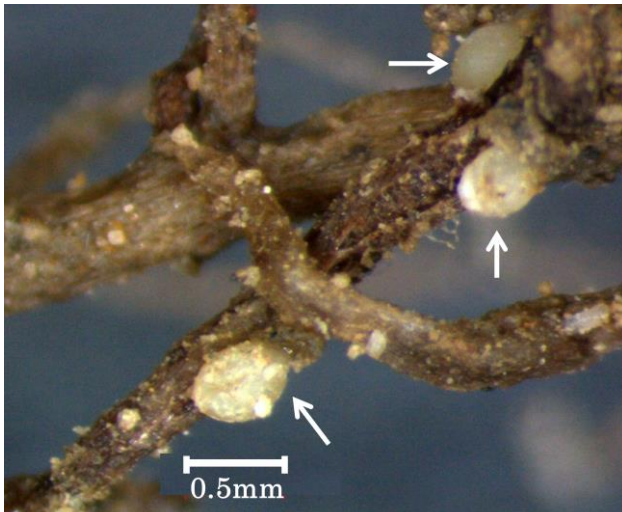


図2 ダイズ根上のシスト (矢印)

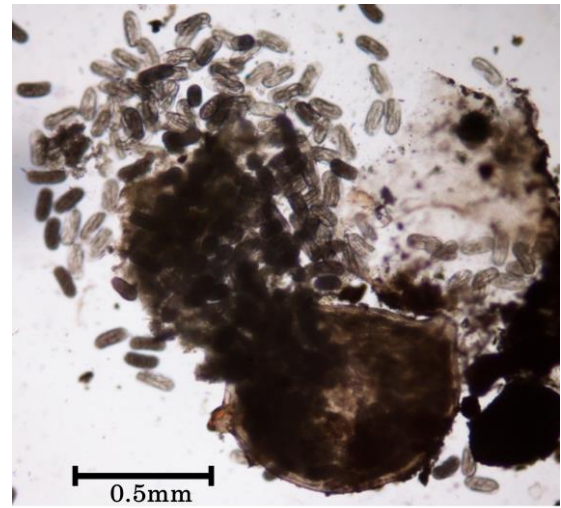


図3 シスト内の卵 (顕微鏡下でシストを
押しつぶして観察)

この情報は、岡山県病害虫防除所ホームページでも公表しています。
アドレスは、http://www.pref.okayama.jp/soshiki/kakuka.html?sec_sec1=239 です。